

この本と私

読むことで、気付くことと
書くことで、判ることがある

「迷子の天使たち」

藤本 義一著

前回の藤本義一氏の「人生の賞味期限」を読んですっかりファンになってしまいました。大阪弁で語られる文章の中にある、取材した人々を優しく肯定し、様々な生き方には学ぶべきところがあると尊重する氏の思いに触れたからです。今回の「迷子の天使たち」は、家族から世間からも異常だと見なされた精神障害者「A」人を紹介しています。自ら精神病棟に体験入院して取材し、そして、本人達の言葉を使って、心の叫びを代弁しています。「少年A」は、父の浮気が原因で離婚した家庭環境に育った結果、暴走族になった「A」歳の少年を取り上げています。彼は暴力沙汰こそ起こしませんが、「2人の関係を暴露する」と父の浮気相手を脅し、大型バイクを買う金を巻き上げ、さらにはその女にまで手を出します。この少年が、更正するきっかけとなったのが、一人の女性の存在。彼女は過去の行いについては何も言わず、すさんだ少年の心に光をともしました。彼女が強姦されそうになったのを助けたのがきっかけでした。彼女はこのときの恐怖で極度の拒食症になり入院しますが、彼は、日に2回の見舞いを半年間続けます。彼女の親に、人の心の暖かさを初めて感じ、奮起して整備士の資格もとります。好意を抱いた彼女との関わりこそ少年を変えるとみた藤本氏は体当たりの対話で、少年に出直しの勇気を与えます。印象に残った一編に触れましたが、どの短編も、異常だと自ら認める通院患者の正直な告白に、人として正常であることの証を感じました。

新潮社

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞